

画数より具体的な言葉かどうかが重要

お母さん方の中には「最初に見せる漢字は、画数や字数の少ないもののほうがわかりやすいのでは？」と気をまわす方もいらっしゃるかもしれませんが、これは無用の心配です。読むだけなら、むしろ画数が多く特徴のある漢字のほうが、記憶の手がかりも多く、覚えやすいものなのです、したがって、お子さんにとって具体的なイメージが浮かぶ言葉であれば、画数や字数は特別意識する必要はありませんし、当用漢字や小学校の配当漢字に入っていない漢字でも差し支えありません。

また「お母さん」「男の子」など、漢字かな交じりの言葉も、「これは漢字、これはひらがな」などと説明せずに、一つの言葉として与えてあげてください。そうすれば、改めてひらがなを教えなくても「お父さん」「女の子」など、同じような言葉が出てきたときに、「ああ、これは“お、”で、これは“さん、”と読むんだな」というように、子どもが自分で類推して、ひらがなも自然に読めるようになっていくのです。

それよりもむしろ注意が必要なのは最初からあまり抽象的な言葉を与えない、ということです。たとえば、私たち大人は「鳥」や「虫」といった言葉を何気なく使っていますが、現実世界には「鳥」という鳥も、「虫」という虫も存在していません。

それなのに、^{すずめ}雀を見ても^{あり}鶏を見ても「鳥」、^{あり}蟻も^{はち}蜂も「虫」というように、大きさも形も異なるものを同じ名前呼んでしまうと、幼児はかえっ

て混乱してしまうのです。

したがって、雀だったら「これは雀よ」、蟻だったら「これは蟻よ」と、まず具体的な名称で教えてあげてください。そうして、雀や鳩、鶴、鶏、家鴨など、個々の鳥を理解したうえで、その上位概念である「鳥」という言葉を与えてあげれば、翼とくちばしがある、全身が羽毛で覆われている、足が二本、といった共通項を通して、その意味が理解できるようになるのです。



具体的な言葉から教えよう